

【日本昔ばなし】金太郎

動画リンク: <https://youtu.be/pKI0OiuYvE0>

今回は日本の昔ばなし、「金太郎」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「金太郎」はとても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「金太郎」のお話を始めます。

昔、金太郎という強い子供がいました。

金太郎は相模国足柄山(現在の神奈川県)の山奥で生まれ、母親の山うばと一緒に暮らしていました。

金太郎は生まれたときから力が強く、7、8歳のころには石臼やもみぬかの俵を軽々と持ち上げることができました。

大抵の大人を相手に相撲を取っても負けませんでした。

近所に相手がなくなると、金太郎は退屈になり、一日中森の中を駆け回っていました。

そして、母親からもらった大きなまさかりを担いで歩き、大きな杉や松の木を切り倒して、きこりの真似をして楽しんでいました。

ある日、森の奥に入っいつものように大きな木を切っていると、大きな熊が現れました。

熊は目を光らせながら、「だれだ、俺の森を荒らすのは」と言い、飛びかかってきました。

金太郎は、「なんだ、熊のくせに。金太郎を知らないのか」と言って、まさかりを放り出し、いきなり熊に組み付きました。

そして足がらをかけて、地面に投げつけました。熊は平伏して両手をついて謝り、金太郎の家来になりました。

森の中で大将の熊が金太郎の家来になったのを見て、

うさぎ、猿、鹿が次々とやって来て、「金太郎さん、どうぞ私も御家来にしてください」と言いました。

金太郎は「よし、よし」とうなずき、みんなを家来にしました。

それから、金太郎は毎朝母親にたくさんおむすびを作ってもらい、森の中へ出かけました。

金太郎が口笛を吹いて「さあ、みんな来い。みんな来い」と呼ぶと、熊を先頭に、鹿や猿やうさぎがのそのそ出てきました。

金太郎はこの家来たちを連れて、一日中山の中を歩き回りました。

ある日、柔らかな草が生えているところに来ると、みんなはそこに足を出してごろごろ寝転びました。

日が心地よく当たっていました。

金太郎が「さあ、みんな相撲を取れ。ご褒美にはこのおむすびをやるぞ」と言うと、

熊がむくむくした手で地面を掘り、土俵を作りました。

まず、猿とうさぎが取組み、鹿が行司になりました。

うさぎが猿のしっぽを掴んで土俵の外へ持ち出そうとすると、猿が悔しがって、うさぎの長い耳をむちゃくちゃに引っ張りました。

うさぎは痛がって手を離しました。それで勝負がつかなくなり、どちらもご褒美がもらえませんでした。

今度はうさぎが行司になって、鹿と熊が取組みましたが、鹿はすぐ角を掴まれ熊にひっくり返されてしまいました。

金太郎は「おもしろい、おもしろい」と言って手を叩きました。

最後に金太郎が土俵の真ん中に立って、「さあ、みんなかかって来い」と大手を広げました。

うさぎ、猿、鹿、熊が次々とかかかっていきましたが、みんな片っ端からころころ転がされてしまいました。

金太郎は「なんだ、弱虫だなあ。みんないっぺんにかかって来い」と言いました。

悔しがったうさぎが足を持つやら猿が首に手をかけるやら、大騒ぎになりました。

そして鹿が腰を押して熊が胸に組み付き、みんな総がかりで金太郎を倒そうとしましたが、どうしても倒せませんでした。

金太郎は最後にじれったくなって、体を一振りすると、うさぎも猿も鹿も熊もみんな一度に土俵の外に転げ出してしまいました。

「ああ、痛い。ああ、痛い」とみんなが口々に言い、腰をさすったり肩を揉んだりしていました。

金太郎は「さあ、俺に負けてかわいそうだから、みんなに分けてやろう」と言って、

うさぎ、猿、鹿、熊を周りに並ばせて、自分が真ん中に座って、おむすびを分けてみんなで食べました。

しばらくすると金太郎は「ああ、美味しかった。さあ、もう帰ろう」と言って、みんなを連れて帰りました。

帰り道も、森の中でかけっこをしたり、岩の上で鬼ごっこをしたりして遊びながら進んでいると、大きな谷川のふちに出ました。

水はごうごうと音を立てて勢いよく流れていましたが、橋はかかかっていませんでした。

みんなは「どうしましょう。引き返しましょうか」と言いました。

金太郎は平気な顔をして「なあに、大丈夫」と言いながら周りを見渡すと、ちょうど川の岸に大きな杉の木が立っていました。

金太郎はまさかりを放り出し、杉の木に両手をかけました。

そして二、三度ぐんぐん押すと、めりめりと音がして木は川の上に倒れ、立派な橋ができました。

金太郎はまたまさかりを肩にかついで、先に立って渡りました。

みんなは顔を見合わせて、「すごい力だなあ」とささやき合いながらついて行きました。

その時、向こうの岩の上いきこりが一人隠れていて、この様子を見ていました。

金太郎が無造作に大きな木を押し倒すのを見て、目を丸くしながら、「どうも不思議な子供だな。どこの子供だろう」と独り言を言いました。

そして立ち上がり、そっと金太郎の後をつけました。

うさぎや熊と別れると、金太郎は一人で身軽に谷を渡ったり、崖を伝ったりして、深い山奥の一軒家に入っていました。

そこには白い雲がわき出していました。

きこりは木の根をよじ登ったり岩に掴まったりして、ようやく家の前までたどり着き、

中をのぞくと、金太郎は囲炉裏の前に座って、母親の山うばに熊や鹿と相撲を取った話をせっせとしていました。

山うばも楽しそうに笑って聞いていました。

その時、きこりは窓から首を出して、「これこれ、坊や。今度はおじさんと腕相撲を取ろう」と言いながら入ってきました。

そしていきなり金太郎の前に毛むくじゃらな手を出しました。

山うばは「おや」と不思議そうな顔をしましたが、金太郎は楽しそうに「取ろう」と言って、すぐにかわいらしい手を出しました。

そこで二人はしばらく真っ赤な顔をして押し合いました。そのうち、きこりは「もうよそう。勝負がつかない」と言って手を引っ込めました。

それから改めて座り直し、山うばに向かって丁寧にお辞儀をして、

「失礼しました。実はさっき坊っちゃんが谷川で大きな杉の木を押し倒したのを見て、驚いてここまでついてきたのです。

今また腕相撲を取って、その力強さに驚きました。この子はきっと将来大物になりますよ」と言いました。

そして今度は金太郎に向かって、「どうだい、坊や。都へ出て侍にならないかい」と言いました。

金太郎は目をくりくりさせて、「ああ、侍になれるといいなあ」と言いました。

このきこりは実は碓井貞光といい、その時日本一の大将で名高い源頼光の家来でした。

主人から強い侍を探して来いと言われて、日本中をあちこち歩き回っていたのでした。

山うばもその話を聞いて大喜びし、「実はこの子の亡き父も坂田という立派な氏を持った侍でした。」

「今は山の中に隠れ住んでいますが、良い機会があればいつか都へ出して侍にして、家の名を継がせたいと思っていました。」

「どうぞよろしく願います」と嬉しそうに言いました。

金太郎はそばで二人の話を聞いて、「嬉しいな、嬉しいな。俺は侍になるのだ」と言って小踊りしていました。

金太郎が碓井貞光に連れられて都へ行くことになり、熊、鹿、猿、うさぎもお別れを言いに来ました。

金太郎はみんなの頭を順番になでて、「みんな仲良く遊んでおくれ」と言いました。

みんなは「金太郎さんがいなくなって寂しいなあ。早く偉い大将になって、また顔を見せてください」と名残惜しそうに帰って行きました。

金太郎は母親に手をついて、「お母さん、では行ってまいります」と言い、貞光のあとについて誇らしげに出ていきました。

それから幾日も幾日もかかって、貞光は金太郎を連れて都へ帰りました。

そして頼光の屋敷へ行って、「足柄山の奥で、このような子供を見つけました」と金太郎を頼光に紹介しました。

「ほう、これは珍しい、強そうな子供だ」と頼光は言いながら、金太郎の頭を撫でました。

「だが金太郎という名は侍にはおかしい。父親が坂田というのなら、今から坂田金時と名乗るがいい」と頼光が言いました。

そこで金太郎は坂田金時と名乗って、頼光の家来になりました。

そして大きくなると、偉い侍になり、渡辺綱、卜部季武、碓井貞光と共に頼光の四天王と呼ばれるようになりました。

「金太郎」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

